

チェルノブイリ通信

2001年1月20日

No.48

発 行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内
TEL・FAX 093-203-5282
E-mail jim@cher9.to
URL <http://www.cher9.to/>
郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



検診報告 4年目のストーリン

- *創作劇「チェルノブイリの子どもたち」の完成・浅川中学での取り組み
- *チェルノブイリの工房「のぞみ21」の歩み
- *雪だるま号の活用
- *ついに発刊、「チェルノブイリとともに・・・10年のあゆみ」
- *妊娠・出産・そして甲状腺ホルモン・・・武市宣雄医師との対話から

いどうけんしん 移動検診報告

ストーリンでの4年間

深まりゆく人々とのつながり

2000年最後の検診が終わった。

4年間で、計8回。早期発見と治療を目指した検診活動。

果たし得たことと、未だに残る課題と。

移動検診の4年間、目標はどれだけ達成できたのか。

文・矢野宏和
(切尔ノブイリ支援運動・九州、代表)

車窓から、ストーリンの道を歩く一人の少年を見つめた。

夏には緑の葉で覆われるトンネルの道。晩秋の今、豊かな街路樹の枝が絡まる狭間から、夕闇へと移り行く空が見える。

初冬を感じさせる冷たい風が吹く道を、少年は歩いていた。

道の傍らに、樹の家が並んでいる。日本のログハウスのように仰々しくない。風土が生み出す素材を活かした家屋は、何の気負いもなくじく自然に佇んでいる。黄色と緑、水色と白など屋根や壁を彩る色彩の組み合わせと、家ごとに異なる窓枠の紋様が、作り手の個性を見せる。

そうした家屋の周りには、菜園と果樹と家畜小屋が取り囲む。十一月ともなると、収穫も終わり、掘り返された土だけが畠に残る。私が聞いた限りでは、農薬を使う人は一人もいなかった。主に牛糞を堆肥として土に施す。

道のそかしこには、馬糞が落ちていた。ストーリンだけでなくベラルーシの大地では、今も馬車は重要な移動手段。はじめてこの地を訪れる日本人は、静かに通り過ぎる馬車の姿に見入ってしまう。そこには、ゆつたりとした時間そのものが流れているようだ。少年が、こちらに気付いて手を挙げた。どうやら私のことを覚えていたらしい。去年の夏、彼とはストーリン地区病院で会っていた。

切尔ノブイリ支援運動・九州による甲状腺の検診を受けた彼は、片桐誠医師からミンスクでの診察を指示され、甲状腺手術を

受けた。

それから五ヶ月ぶりの再会。少年は私のとなりに座り、自宅へと案内してくれる。

ある一つの目標に達したとき、人はそれまでの歩みを振り返ることが許される。この少年との再会により、私たちはストーリンでの今まで続く四年間の取り組みについて、その過程を反芻する機会を得た。四年間で八回の検診を実施してきた私たちにとって、今、私のとなりに座っているこの少年の存在は、私たちが目指してきた検診の到達点を示していたのだった。

「命を守りたい」

移動検診という支援

切尔ノブイリ支援運動・九州による甲状腺検診が、ベラルーシ共和国ストーリンで始まつたのは、一九九七年のことだつた。この検診が生まれた背景には切尔ノブイリ原発事故があり、その影響により多くの甲状腺がんを引き起こすベラルーシの風土があつた。

原発事故後、甲状腺がんは主に子どもたちの間で急激に増えた。が、ベラルーシには、子どもたちに満足な検診や治療を施す力はなく、首都ミンスクから離れるにしたがつて、検診の機会は減り、甲状腺がんの発見の可能性も低くなつた。

甲状腺がんは発見が遅れると、肺などへ転移し、命を奪う。そのため最も愛の息子を失つた人の母親と私は話をしたことがあ

る。そのときには「もっと早くに甲状腺がんが発見されていれば」という想いは、もう言葉にならなかつた。そこには涙しかなく、その沈黙が私には苦しかつた。

死んでしまつてからでは遅いのだ。人でも多くの命を守りたい。首都ミンスクから遠く離れた地方の村で、甲状腺がんの検診を行なう取り組みは、そんな想いから、ペラルーシ、日本の医師とエネルギー支援運動・九州の共同作業としてスタートした。

この活動には、当初、次のような目標があつた。まず検診により甲状腺がんを発見する。次に手術が必要な患者を「雪だるま号」でミンスクの病院まで送り届ける。そして、手術を受けた患者の術後の診察も行う。そこまでフォローして検診の役割は完結するものと考えていた。

そして、この秋に出逢つた少年は、私たちの検診において、そのすべての過程を歩んだ最初の患者だつた。彼は、今年の六月に行われた第七回の検診で片桐誠医師（永寿総合病院、副院長）の診察を受け、ミンスクでの治療、手術を指示された。数日後、彼は「雪だるま号」に乗つてミンスクの甲状腺がんセンターに行き、検査の後に甲状腺を摘出する手術を受けた。さらに、去年の十一月に行われ

た八回目の検診において、清水一雄医師（日本医科大学第二外科教授）の診察により、手術後の検診を受けた。

彼が辿つた理想的な検診の歩みを簡単につぶされば、このたつた数行の記述で終わってしまう。

そして、この歩みを事実として記せるようになるまでに四年間の日々を私たちは必要とした。

たつた一人の少年の検診、手術、術後の診察に至る歩みを成立させるまでの時間として、それが長かつたのか、短かかったのか。それを、この四年間の歩みとともに辿りながら考えてみたい。

このときの検診には甲状腺を専門とする二人の医師が参加していた。武市官雄医師（広島甲状腺クリニック院長）と片桐誠医師（永寿総合病院、副院長）。ス

トーリンでの検診は以後、この二人の医師を中心に、多くの医師の協力を得ながら展開していく。

初めての移動検診

目標への出発点

一九九七年七月二〇日。

これから検診が行なわれようとしてるペラルーシ共和国、ス



片桐誠医師。永寿総合病院勤務。
計8回の検診のうち5回の検診に参加。
現地の医師や患者からの信頼も厚い。

トーリン地区中央病院の検診室は、医療機器や薬品が部屋中に散在していた。はじめて訪れる異国の病院でのはじめての検診。

混乱のうえに混乱が重なつたその検診の状態は、この検診室の状況が物語ついていた。

武市医師は、一九九一年から数多くウクライナやベラルーシで検診を行い、斯くて四時間。この他にもモスクワ空港では医療物資を通関させる際に六時間もかかるなど、予想外の出来事は、検診が始まると前に起つていた。さらに地元の新聞などで紹介されたため、検診を受けようとした。その数は明らかにこの検診人が現れる。その数は明らかにこの検診チームの許容範囲を超えていた。

このときの検診には甲状腺を専門とする二人の医師が参加していた。武市官雄医師を中心、多くの医師の協力を得ながらの検診だつた片桐医師にとつては、それだけ、この検診で感じた「恐いは大きかつた」。

私は一度、片桐医師が勤務する東京浅草の永寿総合病院を訪れ、第一回検診の印象を聞いたことがある。片桐医師は、そのときの様子を克明に覚えていた。「最初は検診会場の広さも部屋数も分かりませんでしたし、日本から搬送した採血や超音波検査に必要な物資や機材が、現地に贈呈する薬品などを混在していたりして、会場設営に楽なように梱包されてもいませんでした。そのために部屋中に荷物が広がっていましたね。それにどの机を使ってよいのか、電源コードがどうなつているのか、検診台のレイアウトはどうしたらよいのか全く未知の状態で、いわば泥縄式に行いました」

そして、こう言葉を続ける。「一回目からは会場設営は簡単に決まりました」

片桐医師のこの言葉は、今まで行なわれた八回の検診を振り返ると、とても意味深い。片桐医師は第一回目の検診の五ヵ月後に行なわれた第一回日の検診にも参加。第一回目の混乱を知っている片桐医師が再度、検診に参加することで、検診システムは飛躍的に整備された。

前回の反省を次に活かすためには、連続して検診に参加する必要がある。しかし、それに伴う負担は大きい。このストーリンでの検診に日本の医師が参加する場合、およそ二週間、勤務している病院を空けなければならない。日本で多くの患者を受け持つ医師にとって、それは容易なことではない。片桐医師の場合、それを一年に二回も行なつたのである。

片桐医師は、翌年の第三回日の検診にも参加。「検診作業をよりスムーズにし、その分、今度は現地の医師の指導にも力を注ぐことができた」という。「第三回日の検診から、現地の医師が準備や検診作業に関わるよう双方が努力し、日本人が検診に出向くというのではなく、現地の人と一緒に働くというムードが高まりました」と片桐医師は語るが、それは

現地の医師との「信頼」を形成したこと

を意味している。

現地医療チームとの関わり

「信頼」による検診の向上

この現地の医師との関わりは、ストーリンの検診をより質の高いものへと変えていく。毎年二度、ストーリンで行なわれる検診は、日本の医療技術を学ぶ場となり、現地の医師は検診室を訪れては、積極的に日本の医師の指導を受けるようになっていた。そのなかでも特に熱心だったあるひとりの医師は、ストーリンでの検診において重要な役割を担っていた。

名を、アルツール・グリゴビイチ。彼は国際赤十字の移動検診チームのリーダーとして、ベラルーシ共和国、ブレスト州全土を医療機器を搭載した車で駆け巡り各地で甲状腺の検診を行なっていた。

その仕事は過酷だ。ときには病院の一室に泊まり、ときに野宿をしながら、学校や地方の診療所で検診を続ける。ブレスト州にあるストーリン地区でも彼は頻繁に検診を行ない、現地の人々からも慕われていた。

アルツール医師が率いる移動検診チームでは、超音波診断装置を用いて、年間で三五〇〇〇人の甲状腺の検診を行な

うことができた。一方、チエルノブイリ支援運動・九州の検診では、三日に渡る検診で診察できる患者は八〇人から〇人と限られるが、甲状腺がんの可能性の高い患者には、その場で甲状腺の細胞を採取し、後で顕微鏡で癌細胞の有無を確認する細胞診を行なっている。

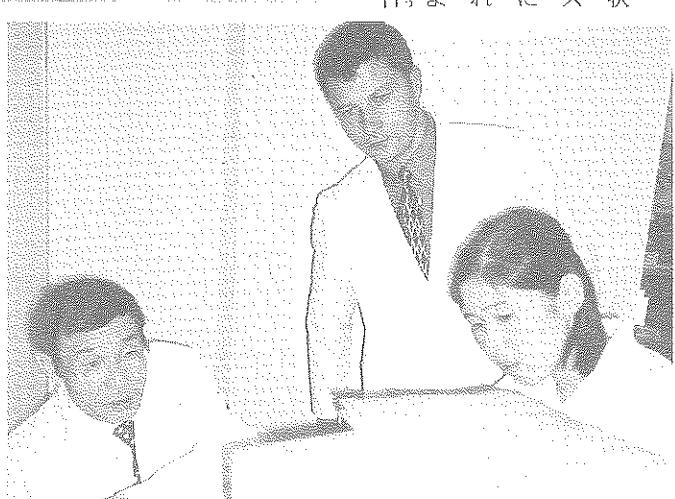
アルツール医師は、自らの検診で甲状腺に何らかの異常を発見した患者に、ストーリン地区中央病院での日本の医師による検診を受けるよう指示を出してくれた。こうして、アルツール医師たちによる検診と、日本の医師による検診が融合

し、量、質ともに充実した検診が行なわれるようになったのである。

この四年間、計八回の日本の医師によ



アルツール医師（右）。国際赤十字移動検診チームのリーダーとしてベラルーシ各地で甲状腺の検診を行なう。



日本の武市クリニックで学ぶアルツール医師（左）。指導するのは武市宣雄医師（右）。これまで四回の検診に参加

た膨大な数の患者があり、そのおかげで私たちの検診における効率、すなわち甲状腺がんの患者を発見する可能性は飛躍的に高まつたのである。

この理想的な検診形態が実現することを、この活動に取り組みはじめた当初、私たちは予想していなかった。それは、現地の医師の「向学心」、日本の医師の「誠意」、そして、両方の医師との間に生まれた「信頼」が実を結んだ幸運な展開だつたと言えよう。

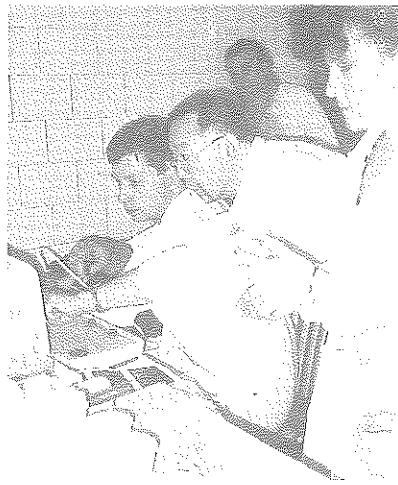
ちなみに向学心旺盛なアルツール医師は、去年の一〇月に来日し、武市医師の病院で研修を受ける機会を得、さらに医師としての技術を磨いている。

走り出した「雪だるま号」

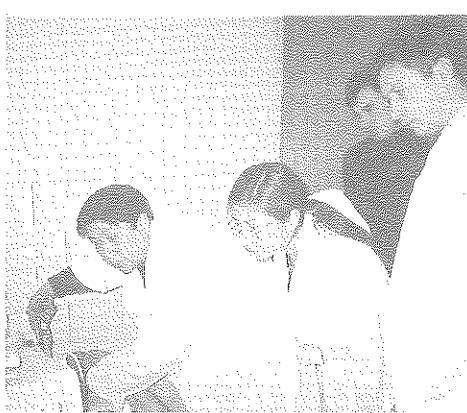
ストーリン病院での検診は、こうして順調に進み、ミンスクでの手術を必要とする多くの患者を発見することができた。

しかしその一方で、病院の外には、まだ問題が残っていた。その一つが、ストーリンから首都ミンスクまでの患者の移動の問題だった。たとえ、私たちの検診を通してミンスクでの診察や手術が必要と分かっても、そこに行けなければ何の意味もない。

検診が行なわれている間、私はストー



ストーリンでの検診は、現地の医師にとつて貴重な学びの場となる。片桐医師の指導を受けながら、経験を積む。



エコーを見ながら、甲状腺の細胞を探取する清水一雄医師と、山田規予美医師、アルツール医師



甲状腺の触診を行なう武市医師

リンの町を歩き、人々の生活を知ろうとした。まず驚いたのが、ミンスクまでの高い交通費と長い所要時間だった。親子でミンスクの病院へ診察を受けに行く場合、交通費だけで二〇ドルかかり、その額は、私の知る限りでは、一般の家庭の月収に相当していた。また、ストーリンからミンスクまではバスで八時間二〇分かかる。これでは日帰りはとても無理で、ミンスクでの宿泊費用もかさむ。

子どもがミンスクでの甲状腺の手術を必要とした場合、その親たちはどう対処するのか。現地の状況に適した支援を行なうためには、まずその現状を明らかにする必要があった。

が、そのためには、甲状腺の手術を受けた子どものいる家庭を訪ね、話を聞かなければならない。検診が始まつて間もない頃、私にとって、その取材はとても困難なことだった。

はじめてストーリンを訪れたとき、一枚の写真を撮影するのにも、私はためらいを感じた。現場での活動の内容を伝えるため、不安を

抱えて検診を受ける人々の写真を、この活動に協力して頂いている日本の人々に届けなければならない、ということは頭では分かっていたが、初対面の、しかも

検診を受けるために病院を訪れている患者にレンズを向けるのは、気持ちが重かった。当時、ストーリンの人々と私との間にはそれだけ距離があつたのである。現地の患者と信頼を深めている片桐医師たちの姿が私にはとても羨ましく思えた。だが、検診活動が回を重ねることに充実していくたのと同様に、二度、三度と繰り返しストーリンを訪れるうちに、親しく言葉を交わせる友人もでき、ストーリンの町を「雪だるま号」で自由に移動できるようになつた。

一九九九年六月に行なわれた五回目の検診に参加したとき、当時、ミンスクの甲状腺がんセンターで甲状腺の手術を行なつていた曾谷昭医師に、ストーリン在住で甲状腺の手術を受けた子どもの住所を教えて頂いたおかげで、四件の家庭を訪れ、取材することができた。

甲状腺に異常が発見されてからミンスクへ行き、手術を受けまるまでの道のり。それは、私の予想以上に厳しいものだった。ある母親は、ミンスクでの宿泊場所もなく駅で夜を明かし、夜行列車のなか

では、一晩中立つたまま過ごした子どももいた。

交通費の負担も大きく、けれども、子どもだけは何とかミンスクへ連れていきたいという母の想いが痛々しい。

(チエルノブイリ通信N°44参照)

「お金がないという理由で、ミンスク行きを諦める患者がいるかもしれない」というそれまで抱いていた懸念は、この取材を終えた後、私のなかで確信に変わっていた。

医療スタッフの交通手段として使われていた移動検診車「雪だるま号」を患者の移動手段としても活用しようというプランは、こうした社会背景から生まれた。雪だるま号は去年の十一月から月に二回ずつストーリン市民を乗せて走り、これまでに一五〇人以上の患者をストーリンに送り届けている。(チエルノブイリ通信N°46参照)

深刻な実状

不足するホルモン剤

私がこの秋に再会した少年は、今年の六月にはストーリンで検診を受け、その後、「雪だるま号」でミンスクへ行き、手術を受け、十一月の検診で術後の診察を受けたのだった。

二〇分ほどで着いた少年の家も、菜園

に開まれていた。

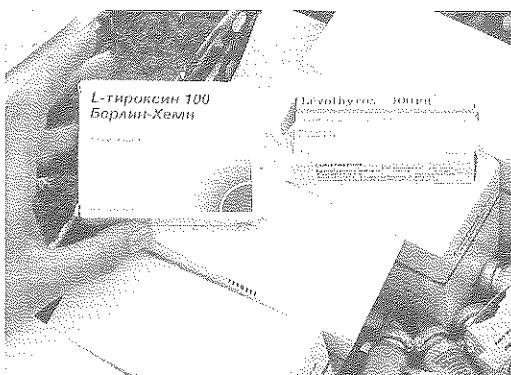
彼の父と母は、十年前に、このストーリンに移ってきたという。それ以前に住んでいた村は、高濃度汚染区になつたため、移住を余儀なくされたのだ。

デザイナーである父は、新しい家を買おうために、生まれたばかりの少年と妻を残して、シベリアへ出稼ぎにいかなければならなかつた。

父親に「辛くなかった?」と問うと、「いやあ、家族のためだから」と笑う。隣で燃えているペチカが温かい。

少年は今、エンジニアを目指して、専門学校に通つてゐる。自動車に関心を持つてゐた。雪だるま号に乗つた感想を聞くと、「とても速かつた」と嬉しそうに言う。

少年はミンスクで甲状腺を摘出する手術を受けた。だから、ホルモン剤により、体内が必要とするホルモンを補充しなければならない。



ベルラーシで不足するホルモン剤。現在、ベルラーシ国内でこの薬を生産することはできず、海外からの援助に頼らざるを得ない状況にある。

クレタ医師にもしていた。

年に一回、ストーリンでの検診の際、チエルノブイリ支援運動・九州では、ホルモン剤をストーリン地区中央病院に贈呈していた。それが、きちんとストー

リン市民に行き渡つてゐるのかどうか。

セクレタ医師は私に、ホルモン剤を受け取つた方の名前が記された名簿を見せてくれた。彼はこの他にも、雪だるま号に乗つてミンスクに行つた人の記録を欠かさず保管してくれており、彼のおかげで、私たち支援物資がどのように活用されているかを確認することができた。セクレタ医師はごく当たり前のようになつていて、雪だるま号に乗つた感想を聞くと、「とても速かつた」と嬉しそうに言つた。

少年の病院でもホルモン剤はもらえることになつてゐるが、前述したように、ミンスクまでは遠く、時間もお金もかかる。

私たちが予想していた以上に、ホルモ

ン剤の消費量が多かつた。「ホルモン剤がなくなつた後、ストーリンの人々はどうされるんですか」と問うと、「薬局で購入するしかない」という。だが、薬局にも置いていないケースもある。また、ミンスクの病院でもホルモン剤はもらえることになつてゐるが、前述したように、ミンスクまでは遠く、時間もお金もかかる。

体内のホルモンが不足すれば、様々な弊害が人体に及ぶ。「もつと、たくさんホルモン剤を持つてこないとダメですね」と私が言うと、セクレタ医師は深く何度も頷いた。

甲状腺を摘出されれば、その後、一生、ホルモン剤を必要とする。私たちの検診を受け、ミンスクに行き、手術を受けたこの少年もまた然り。

私たちのはいつまでも一つの目標を達成したことに喜んではいられなかつた。この少年も、彼を見守る両親も、そして私たちも、今後、ホルモン剤の提供という課題と、絶えず向き合つていかなければならぬだろう。

その前日、私は同じ内容の質問を、ス

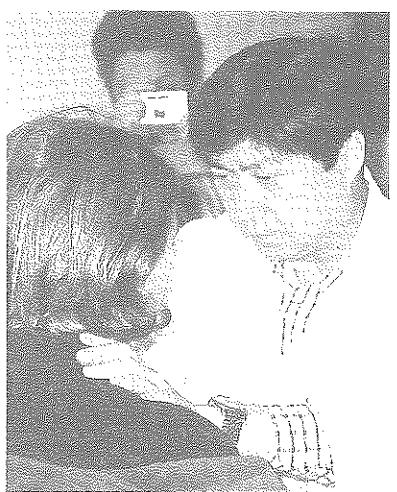
トーリン地区病院内分泌病棟、所長のセ



細胞の染色作業を、現地の医療スタッフに説明する臨床検査技師の藤岡智美さん。



エコーによる診断を行なう山田規予美医師は、今回が初めての参加。



今年11月に行なわれた第8回目の検診。触診を行なう清水一雄医師。

移動検診の充実へ向けて

医療スタッフの意欲

少年の家での取材を終えた頃には、もうほとんど日が暮れようとしていた。

病院に戻ると、第八回目の検診もほとんど終わりに近づき、最後の患者の検診が行なわれていた。病室の壁には検診の際に使う簡単なロシア語がカタカナで記された紙が貼つてある。

それを頼りに、清水一雄医師（日本医科大学第一外科教授）が優しく語りかけ、患者を落ち着かせる。日本の医師を前にすると、ストーリンの人々はどうしても緊張してしまうらしい。

今回の検診には武市医師も参加する予定だったが、急用のため検診には間に合わず、今回で一度目の参加となる清水医師が検診全体の指揮をとった。はじめての参加となる山田規予美医師（日本医科大学第二外科医師）は、これまでアジアの国々で検診を行なつており、経験も豊富。また、となりの部屋では、海外渡航そのものがはじめてという臨床検査技師の藤岡智美さん（広島甲状腺クリニック）が、現地の医療スタッフとともに黙々と細胞の

染色作業を行なっているが、それもすぐにならう。

今回、日本から派遣した検診チームのメンバーは、すべて初顔合わせだったがトラブルもなく、検診は終始おだやかな雰囲気で順調に進められた。

第一回目の検診のときに参加した臨床検査技師の角さんが、深夜までかかって染色作業をしていたという話をふと思い出す。角さんは、その後、二回、三回と片桐医師とともに検診に参加し、現地の医療スタッフに染色作業のノウハウを教えた。

はじめての検診にもかかわらず、藤岡さんがその日のうちに作業を終えられるのも、これまでの検診の蓄積によるところが大きいようだ。「現地の医療スタッフの人たちは、作業の流れを知っていたので、染色についても私が細かく教える必要はありませんでした」と藤岡さんは語り「機会があつた」とまた参加したい」という感想を残してくれた。ストーリンの検診に関わる医療スタッフは、年ごとに増え充実している。医療のスペシャリストたちが意欲的にこの検診に関わってくれるといふことも、この検診活動の特色の一つだ。

そして五年目へ

四年間の検診が終わり、私たちは、この間の継続のなかで経験を積み、そして「信頼」という確かな人のつながりを手にすることことができたと思う。だ

から、次から次へと現れる課題にたいしても、それを克服するまでの道筋を、わりと簡単にイメージできる。

課題は多い。この少年のように理想的な検診を受ける患者の数をさらに増やすこと。また来年、行なわれる検診では、過去八回の検診で、日本の医師により異常が確認された患者を集めて再検診することも、今後の課題としてある。

五ヵ年計画で始まったこの活動も、来年でいよいよ最終年を迎える。どれだけ、その完成度を高めることができるか。そして、そこからどのような展望が開けるか。その歩みは、市民運動が持つ可能性を示してくれるような気がする。

充実した医療支援を実践するチャエルノブイリ連帯基金で雪だるま号が活用されました。

ペラルーシでの移動手段として、多くの団体による活用を願っています。

「雪だるま号」

ー新たな役を引き受けでー

今年の七月、ペラルーシではずっと雨が降り続いていた。チャエルスク近辺のソージ川の河川敷は、増水により草地が地面にへばりついていた。森を抜ける道は、ところどころ水はけが悪く、大きな水溜まりが残っている。

「雪だるま号」の運転手さんであるジーマは、スタッフしないようハンドルを巧みに切りながら、ゆっくりと私たちを埋葬の村ブジンチエに案内してくれた。

JCF／日本チャエルノブイリ連帯基金は、この夏、プロジェクトと三つの訪問團をペラルーシに送った。

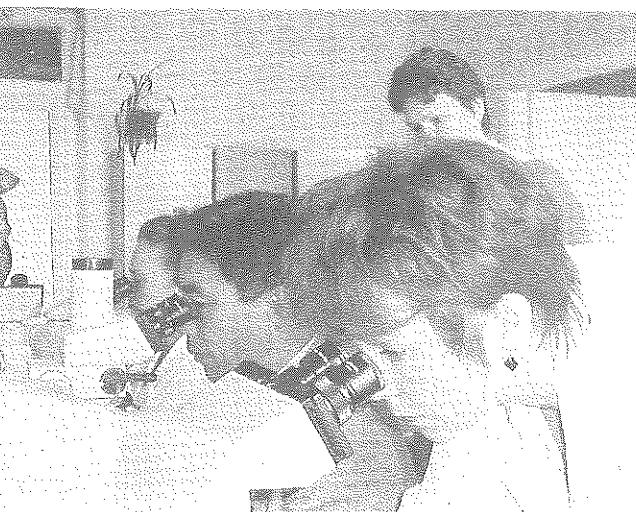
(株)カタログハウスさんがモスクワにおいてくださったワゴン車が、ペラルーシまで駆け回ってくれていた。一九九二、九三年は、とても便利に使わせていただいた。しかし、裏アーティ局の取材がこの地に入り、潤沢な取材費から車輌のギヤラが支払われて以来、私たちのようにささやかな民間支援団体にとって現地交通費は厳しいものとなつた。

昨年、カタログハウスで開かれた「チャエルノブイリ支援者会議」で、チャエルノブイリ支援運動・九州さんから、「移動検診車」「雪だるま号」が空いている時は、使ってください」と言っていた。今年の夏、JCFの訪問團は七月二六日から九月十七日まで、二千

走れ!
『雪だるま号』

ペラルーシの 大地を 自由自在に疾駆

チャエルノブイリ連帯基金 (JCF)事務局長
神谷さだ子さんからの報告



チャエルノブイリ連帯基金によるゴメリ州立病院での白血病の検診

に降り立ち、周りを見回したがそれらしき人はいない。白色のワーゲンのワゴン車が、一台、駐車場にあった。駆け寄つて声をかける。しかし、首を振られてしまった。どうも、モスクワからミンスクに、到着する列車は一本あるらしい。私たちの乗つたミンスク止まりと、ミンスク経由で他の地方へ行く列車が一時間違いで到着したようだ。この日は「雪だるま号」に会えなかつた。

予約をしていたもう一台の車に七人分もの荷物をギュウギュウに詰め、なんとかホテルへ向かつた。

こんな行き違いにもめげず、八月三一日から十七日間、「雪だるま号」をゴメリで使わせていただいた。八月に入つてからは肌を射すような暑さだつた。映画撮影スタッフを乗せ、チャエルスクからゴメリ経由でブジンチエ村に向かうような長距離にも、運転手のジーマは頑張つてくれた。そして、第五十七次訪問團では、白血病のためのエコー診断画像を衛星通信で日本に伝送するテストにも成功した。その後、血液検査のレクチャなどを順調に終えた信州大学医学部小児科の小池健一先生、木下達也先生、付属病院輸血部の伊東進さんは、無事、帰路に着くことができた。

日本のチャエルノブイリ支援団体には、それぞれのモチベーションと活動エリアがあり、それを統一して管理することはないと思つてゐる。しかし、そんな中にも情報を共有したり、「雪だるま号」を借りられる今回のよだな関係がお互いにできたら、効率がよくなる事はもちろん、情報交換もしやすくなる。

何よりも安く車をお借りできたことに感謝します。そして、逆に、JCFの持つているものでお役に立てることがあれば、使ってください。垣根のない自由なつながりに感謝です。

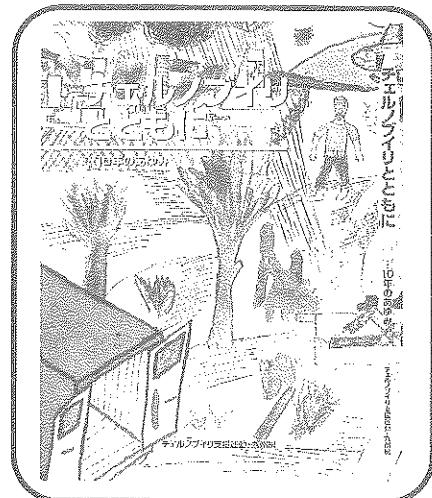
シ赤十字のロマノフスキー総裁に連絡していただき、準備が整つた。しかし、ミンスク駅のプラットホーム

NEW BOOK

チエルノブイリ支援運動・九州

活動10周年記念誌出版!

ぜひお買い求めください。



チエルノブイリ支援運動・九州結成から十年が経過しました。これを機に、これまでの歴史を整理し、今後の支援運動の取り組みに生かしていくために、「十年のあゆみ」を編纂しました。十年史の案内は随分前に行い、原稿等も出版しました。十年史の案内は随分前に行い、原稿等も募集していましたが、発行が少し遅れてしましましたが、無事発行できましたので、お知らせと購入のお願いをする次第です。

十年史の内容を少し紹介します。結成前史として、八六年四月に起きた事故のこと、日本にもやつてきた放射能やその影響、食卓に上がってきた汚染食品、三年の沈黙を破り発信されたチエルノブイリからの報道、救援を求める一通の手紙など。第二、三章では、九〇年六月結成前後の動き、翌年、様々な想いを秘め出発した第一

次調査団のこと、帰国直後から九州各地で取り組まれた調査報告会。わずか半年の間に八〇ヶ所を超える会場で報告会が開催され、支援運動の土台が作られていました。第四章では、支援運動の真価が問われたサナトリウム・九州と里親運動、パレスカヤ・ゾーラ子力九州・山口公演のん末などをまとめています。サナトリウムを運営していくために私たちが毎年五万ドルを支援していることを決め、里親運動を呼びかけました。この決断により、支援運動の組織・運動は大きく飛躍し、会員も二〇〇〇人を超えました。

第五章では、チエルノブイリの生きた証言集である「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の出版にまつわるエピソード、若者たちからの反響などをまとめ、本のタイトルにもなったイーゴリ・マローブの「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」を収録しています。サナトリウム・九州は九六年十月にペラルーシ側の事情により閉鎖となりました。九二年十二月のオープン以来、汚染地に住む子どもたち（七六四人に保養の機会を提供できただことは、子どもたちには大きな心の支えになったものと思います。また、ベラルーシ保健省が実施した「保養の効果についての調査」の結果、ミンスクの「スヴィスロツチの九州」が最も高い評価を受けたことは、私たちにとっても大きな励みとなりました。

第六章のチエルノブイリ十周年では、スタディーツアを中心とした新聞記事で編集しています。第七章は、現在取り組んでいる「移動検診車」導入による早期診断・治療システムについて。六回に亘る検診結果の報告、移動検診で必要なこと、武市医師からの報告、片桐医師との対談 ストーリン地区での移動検診・その成果と課

題、などとなっています。

最も力を入れたのが、というか時間がかかってしまったのが活動日誌の整理です。十年分を年表形式でまとめています。やめとけば良かったのですが、日本・世界の動きも同時系列で見れるように作ったため、編集作業の半分以上の時間を費してしました。発行が大幅に遅れたのも、こちら辺りに原因の一端があるかもしれません。しかし、原発をめぐるこの十年の動きの変化が、一日で見ることができる便利な日誌に仕上りました。

支援物資・支援金の一覧も年度毎に整理しています。

解説は、支援運動の顧問である今中哲一さん（京都大学原子炉実験所）に書いていただきました。事故の概要、放射能汚染の実態、チエルノブイリ型原発の仕組みの解説。九五年十一月の「もんじゅ」ナトリウム火災事故、九七年三月の東海村再処理工場でのドラム缶火災爆発事故、そして昨年九月三十日に起きたJCO臨界事故と、「起きるはずのない」事故がたて続けに発生している。「何が起きても不思議でない」のが日本の原子力の実態だ、「日本の原発だけは安全だ」とする迷信を鋭く批判しています。

その他、写真で見る十年のあゆみ、子どもたちの中のみなさんからの声、全国の支援団体の紹介など豊富な内容になっています。

A五版、三〇二頁、税込み価格一、一九〇円（税込み本体一、〇五〇円、送料一四〇円）です。ぜひお買い求めください。

（チエルノブイリ支援運動・九州前代表、深江 守）

劇

「チエルノブイリの子どもたち」の完成



鹿川中学とチエルノブイリ支援運動・九州との関わりは今年の六月から始まった。チエルノブイリ支援運動・九州による説明会をきっかけに、生徒たちは、現地スタッフのリュドミラ・ウクラインカとの文通や夏休みの自由研究を通してチエルノブイリについて学ぶ。そして、その集大成として、11月に行なわれた文化祭で、チエルノブイリを描いた創作劇を完成させた。事実を知り、想像力を駆使して展開させた創作劇。そこで生徒が学び得たことは……。

チエルノブイリの子どもたちが書いた作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」を用いて作られたこの創作劇には、チエルノブイリが引き起こした幾多の困難が描かれていた。

合唱部に入り、甲状腺がんの手術の後遺症である声の障害を乗り越えていく主人公リユーダ。

事故の時に、音楽の先生のおなかの中に

いた息子イワン。彼は生まれつきよく目が見えず、その看病に疲れた父親は自然と家から遠ざかり、今は母親と一緒に暮らししている。

少年オレグは、事故で汚染された村から移住した。今では立ち入り禁止区域になっているその村も、豊かな自然に囲まれていたが、今では黄色と黒の放射能マークの看板が立っている。両親も体が弱く、オレグが成人するまで生きていられるのか不安に思っている。そんな両親に、オレグは大きくなつたら科学者になつて放射能を消せる薬を発明したいと話す。

合唱団で歌うナターシャの父は、事故の時に消防活動をした消防士のひとりだつた。母と兄とお墓参りに訪れ、花を捧げる。

墓地には父のように消防活動をした二七人の英雄が眠っている。彼らの体は、あまりにひどく被ばくしたため、鉛の棺桶に入れ埋葬されているという。父の体もまた、再び上に還ることはない。

劇のなかに幾重にも織り込まれたチエルノブイリの過酷な現実。それを学び、劇を作ることで、生徒たちは何を見い出したのか。

「事故については知らなかつた。でも調べていくうちに興味がわいてきて、私はどうしてこれまでこのことを知らなかつたのかとショックだった。」と創作劇に参加した松尾有希子さんが語るように、ほとんど生徒にとって、今回の取り組みが、チエルノブイリを知る機会になつたのは確かだ。

そして、知るだけでなく、創作活動を通してチエルノブイリに生きる人々への想いを深めていく。

主役を演じた太田黒亜里沙さんは、次のように語っている。「自分が体験していないことを演じることが特に難しかった。甲状腺がんを受けたショックや歌いたくても声が出ない気持ちを想像するのに悩みまし

た。作文集やリュドミラ・ウクラインカさんからの報告やビデオレターの言葉を元にして、リューダの気持ちに近づける

ようしました」

今回、 Chernobyl のボランティアをテーマに選んだ先生たちには、「生徒たちにもっと外の世界を知つて欲しい」との想いがあつたようだ。狭い世界だけで、自分を見限つてしまい、絶望している子どもたちが今、日本ではだんだんと増えてきているなか、「外の世界を知れば、普段の生活や勉強にも別の意味を見い出せるのではないか」と思つたと

いう。

先生たちのそんな期待は、的中したといつてい。 Chernobyl の問題について知つた後すぐに、生徒たちは Chernobyl への想いを文章にした。そして今度はそれを英語で表現しビデオレターにして届けた。そこには、得点を競うためではなく、想いを伝えるために必要な手段としての作文があり、英語があつた。さらに生徒たちの関心は予想を超えて拡がつていく。

「夏休み期間、 Chernobyl や放射能に関する新聞記事で気になつたものを集める」という宿題に対しても、生徒たちの関心は新聞だけでは納まらなかつた。図書館、百科事典、インターネットを使って情報を集めている。関心の及ぶ

範囲も Chernobyl 、ヨーロッパに関わる歴史や原子力発電の構造など多岐に渡つた。

今年、六月に、 Chernobyl 支援運動・九州が浅川中学での説明会を行なつたとき、「最後まで話を聞いてくれるだろうか」という不安は先生たちにもあり、また Chernobyl 支援運動・九州の方にも確かにあつた。

だが、「自分たちと同じ世代の子どもが、実際に Chernobyl の影響を受け、健康を壊したり、ガンになつて手術を受けなければならないという困難な状況に大きなショックを受け、これがもし自分がつたらどうふうに考えたようでした」と先生たちが振りかえるように、生徒たちは Chernobyl の出来事を自身の問題として受け止め、創作劇「 Chernobyl の子どもたち」の完成に至るまで、想像力を駆使しながら遠く離れたベラルーシの人々のことを考え続けた。そして、二〇〇〇年十二月十六日、 Chernobyl 原発が閉鎖したその日も、クラスでは、自然とのニュースが話題にあがつていたという。

ベラルーシからの報告

事故から15年目、それぞれの今

Chernobyl を乗り越えて生きる人々からのメッセージ

自立を目指して、工房「のぞみ21」を営む

ナターシャさん、ステファンさん、ヘレンさん（ベラルーシ共和国、ゴメリ在住）

Chernobyl で傷ついたこころのケアに取り組む

リュドミラ・ウクラインカさん（ベラルーシ共和国、ミンスク在住）

（日本での講演予定）

4/13 (金)	来日	4/22 (日)	宮崎
4/14 (土)	関東一明治学院大学（予定）	4/23 (月)	大分
4/15 (日)	京都一京都精華大学（予定）	4/24 (火)	大分
4/16 (月)	京都観光	4/25 (水)	北九州一浅川中学（予定）
4/17 (火)	広島	4/26 (木)	福岡
4/18 (水)	山口	4/27 (金)	佐賀
4/19 (木)	移動	4/28 (土)	福岡
4/20 (金)	移動	4/29 (日)	成田へ移動
4/21 (土)	鹿児島	4/30 (月)	帰国

詳細は、次号の Chernobyl 通信にてお伝え致します。

皆様のご参加をお待ちしております。

ベラルーシで工房「のぞみ21」を営むナターシャとステファンが、日本とのつながりを作るまでの物語

工房 のぞみ21 その名に亥まれし、母と父の想い



ゴメリの街の片隅に、工房「のぞみ21」がある。そこでは、身体や知能に何らかの障害を持つたスタッフが衣服や民芸品の作成に取り組んでいるが、そのなかには甲状腺の手術を受けたスタッフも含まれている。

ナターシャとステファンがこの工房を営むきっかけとなつた出来事は、チエルノブイリ原発事故と深く関わっていた。

二人の息子オレッグは、幼い頃に白血病を患つた。オレッグの治療に付き添いながら、ナターシャは、チエルノブイリ原発事故の被害者への国の鈍重な対応に疑問と不安を感じるようになる。「チエルノブイリの被害を過去のものとして忘れようとしている。病氣で苦しむ子どもたちをそのままにして」

ナターシャは迅速に対応した。彼女は、

同じように病気を持つ子どもの母親に呼びかけて、「自分たちの手で物品を作つて販売しよう」と自立への活動を開始する。

それまで幼稚園の先生だったナターシャに商売の経験があるはずもなかつた

が、迷つている時間もなかつた。

一度、言い出したら止まらない。そんなナターシャの性格とは対照的に、後ろから黙つて見守るタイプの夫ステファンは、このときも同じスタンスで対応した。

しかし、この件に関しては、ただ見守るだけではすまなかつた。大工として建築業を営んでいたステファンは、まずス

タッフたちの作業場を作るべく、廃屋の改築に取りかかる。さらに木工の技術をスタッフに教えるため、彼はそれまで勤めていた会社を退職し、工房の運営に専念していく。

こうして、ナターシャによる洋服作り、ステファンによる木工の二つの分野の創作出が可能になった。

やがて、白血病を克服した息子オレッグも工房の運営に関わるようになる。絵画や工芸に優れた才能を持つ彼は、学校でデザインを学び、工房の作品のレベルを上げるうえで欠かせない存在となつた。

そして、今も、オレッグはこの工房にとつて重要な役割を果たしている。

その一つが、作品を販売するための市場の拡大だつた。

工房「のぞみ21」で作成された工芸品や民族衣装の市場がベラルーシ国内に限られていたら、充分な需要を得ることはできずに運営は行き詰まつていたかもしれない。

しかし、この工房「のぞみ21」は、幸運にも日本とのつながりを得ることができた。現在、この工房で作成された民族衣装や工芸品は、チエルノブイリ支援運動・九州を通じて日本に届けられ、販売されている。

日本とのつながりを得たという幸運。それはオレッグの存在を通して生まれ

た。

しかし、その幸運は、ベラルーシのひとつのお族に起つた悲劇から生まれたものだった。

三年前のこと。

窓から菩提樹が見えるミンスク甲状腺がんセンターの一室。そこには、ベットに横たわるオレッゲの姿があった。その傍らにはナターシャとステファンがいる。

いつまでも咳が止まらないオレッゲを

病院に連れていったのは、その年の春。

そのときには、オレッゲの肺には、甲状腺からすでにがん細胞が転移していた。手遅れだった。

ドイツでの治療も効果を得ることはできないまま、時は過ぎていく。
そして――。

一九九八年、十二月。ナターシャとステファンにとつて、最愛の息子との今生の別れを迎える時間が迫っていた。

入院中から、オレッゲはすべてを知っているかのようだった。「この病気が治り、退院することができたら、僕はこれまで全く違う気持ちで生きていこうと思う」と彼は語っていた。

湖桃のようだよ」と。
それは、心配そうに見守る両親に贈ら

れた最期の言葉。

「僕たちは、胡桃のように堅く、一つになつていて。だから、どんなことがあつても離れたりしない」

そんな言葉を残されて、しかし、ナターシャとステファンの心を覆つたのは、深い喪失だつた。

オレッゲがこの世を去つてしまふ、ナターシャは、自宅に歸ることが苦痛になる。家に歸れば、オレッゲの不在を痛切に感じてしまうから。

その分、工房で仕事をする時間が増えた。ステファンも、その場を離れない。

生きる場所は、そこにしかなかつた。タッフたちにとつても同じことだった。売り上げが少なく、運営が厳しくなつた

ときも「給料はいらないから」と、この王房の存続を希望したスタッフたち。

上房のスタッフは、ナターシャとステファンを必要としていた。同様に、二人

にとつても、「息子を失つた後、工房で過ごす時間が救いだつた」と言う。

だから、工房の運営を止めようなどといふ考えは全くなかつた。「子どもたちが待つているのに、どうしてそんなことができるですか」とナターシャは語る。

オレッゲの死は、彼を見のように慕つ

ていたスタッフたちにとつても悲痛な出来事だった。そのスタッフたちを前にして、不安を与えるような表情や言動はできなかつた。大きな悲しみに包まれた工房で、ナターシャとステファンは、くじけそうになる自分たちの心を必死の想いで立て直していく。

甲状腺がんの早期発見に取り組むチエルノブライ支援運動・九州のスタッフが取材にきたのは、オレッゲの死後、二年経つてからのことだつた。

「甲状腺の手術をした若者が働く作業所がある」という漠然とした情報だけを便りに、工房を訪れたチエルノブライ支援運動・九州のスタッフは、偶然にもその工房を営む夫婦が、甲状腺がんのため息子を失つていたことを知る。

「甲状腺がんは発見が遅れれば、命を奪つてしまふ」という事実だけでも強烈だつた。さらに、そこから始まるナターシャとステファンの苦みは、チエルノブライに閑わる人にとって、多くのメッセージが含まれていた。そこにはチエルノブライによって最愛の息子を失つた親の哀しみがあり、その悲劇のなかで再生を果たした人間の強さがあり、支えあい寄り添いながら、未来を信じる確かな視野

その後、チエルノブライ支援運動・九州では、この工房を日本で紹介する必要があると判断し、その年の八月に行なわれたスタディーツアーのコースに、この作成された作品を継続して日本に持ち帰り、バザーやチエルノブライ通信を通して販売し、二〇〇一年の四月には、関東や九州各地で講演と作品の展示会をするプランを立てた。

日本に行くことなど、ナターシャとステファンは想像もしていなかつたらしく、この来日の依頼を受けると、とても興奮した様子だつた。「何を話したらしいのか」少し不安を隠せないナターシャに、チエルノブライ支援運動・九州は、「なぜ、現在ののような活動をするようになったのか、また、これまでの活動を通して経験したことや感じたことをありのままにお話しください」と説明し、さらに、こう言いかえた。「差し支えなければオレッゲさんのこととも語つて頂ければと思います」と。

一瞬、ナターシャの表情が静まる。少しの間をおいて、「そうですね。オレッゲがいなければ、このような活動はしていなかつたでしょうし、日本のみなさんとお会いする機会もなかつたでしょうね」と微笑みながら語つたのだった。

インタビュー

妊娠・出産・そして甲状腺ホルモン 次世代をも巻き込む苦しみ

事故から一五年を過ぎようとする今

チエルノブイリが引き起こします

新たなる被害



武市 宣雄 医師

Nobuo Takeichi

広島甲状腺クリニック院長

昭和43年広島大学医学部卒

昭和52年アメリカUCLA助手

平成11年広島大学非常勤講師

「コンフィデンス」のイリーナさんとの対談中、「気になることを聞いた。「甲状腺の摘出手術を受けた妊婦は、そのことを隠す」というのだ。なぜなら、「手術のことを話すと、出産に際して生じる体内的異常に、病院側が責任を持てない」ということを理由に、病院で受け入れてもらえなくななるからだという。

この話が事実かどうか。まだ確かめてはいない。それは單なる噂かもしれない。だが、いずれにしてもこの話には、一つの重要な問題が含まれている。甲状腺の手術を受けた女性の出産についての問題だ。

もし、私が武市宣雄医師（広島甲状腺クリニック院長）による甲状腺に関するレクチャーを受けていなかつたら、この本当か嘘かも分からぬ話に、気をとめることはなかつただろう。私は、過去三度に渡って、武市医師から次のような内容のレクチャーを受けていた。「女性といふんはね、子どもを生むときには、ものすごく甲状腺を傷めるものなんよ。そのためには、女性は身体

を締め括る。「奥さんに子どもを産んでもうたら、絶対に男の方から離婚しちゃあいけん。出産で傷んだ奥さんの身体をしつかりと守つていかんといけんのよ」

幾度となくこのレクチャーを受けたおかげで、「出産において、女性は甲状腺を傷める」という認識は、私のなかに完全に刷り込まれていた。だから、イリーナさんの対談のなかで「甲状腺」と「妊婦」という二つの言葉を結び付けたときに、すぐに、こんな不安が浮かんだ。「甲状腺ホルモン剤が慢性的に不足するベラルーシで、甲状腺の摘出手術を受けた女性、すなわち自らの体内で甲状腺ホルモンを作れない女性は、一体どうなるのか？そして、新たに生まれてくる子どもには、何らかの悪影響が及ばないのだろうか？」

チエルノブイリ原発事故から十五年が過ぎようとしている。幼い頃に甲状腺の手術を受けた子どもたちは、結婚し、子どもを産み、親になろうとしている今、その出産に際してどのような問題が起り得るのか。

の調子が悪くなったり、精神的なバランスが崩れたりと、そりやあもう大変な想いをするんじやから」

そして、武市医師はいつもこう言って話

甲状腺の専門医として、長年チエルノブイリの問題に関わっている武市宣雄医師のレクチャーを、私はもう一度受けてみようと思つた。

—甲状腺ホルモン（剤）と妊娠、出産の問題を考えるにあたって、まず、甲状腺と、そこで分泌される甲状腺ホルモンの基本的な役割についてお聞きしたいのですが。

「甲状腺とはヒトの寿命をコントロールする大切なホルモンを生産する臓器です。甲状腺ホルモンにより、人間は身体や知能を発達させています。またこの他に、食物をエネルギーに変えたり、他の内分泌ホルモン（性ホルモン、成長ホルモン等）を助けたりと、多くの役割を担っています。」

—つまり、甲状腺ホルモン（剤）は、人間の生命を維持するのに欠かせないものということになりますが、妊娠した女性は、自分以外に胎児という新しい命を体内で育まなければならなくなります。

甲状腺ホルモン（剤）が充分に供給されていない状況で、妊婦の身体にはどのような変化が起こるのでしょうか？

—妊娠期間中にこの甲状腺ホルモンの不足が起こりますと、その女性のエネルギー生産が不充分となり、体力低下を引き起します。その結果、妊娠の維持が難しくなり、「流産」を起します。また、甲状腺ホルモンの不足は糖尿病、高コレステロール血症（高脂血症）、高尿酸血症

（痛風）等の三大代謝病を引き起こす可能があります。この事が妊娠に影響を与える事は無視できません」

—妊娠期間中からすでに、甲状腺ホルモン（剤）の不足により体内の異常が生じるうえに、激しく身体を消耗させる出産が加わると、妊婦にはどんな障害が生じるのですか？

—「出産時の甲状腺ホルモンの不足は早産の原因となります。また妊婦のエネルギー不足も当然招くことが考えられ、そうなるとこれが出産時の母体の体力不足の筋肉の筋力低下、子宮収縮機能の低下等を引き起こし、ひいては難産になると考えます。」

—出産の後、母体はかなり消耗すると思います。そのような状態で、まず母乳はきちんと出るのですか？

—甲状腺ホルモン（剤）が不足している場合、母体のなかで成長する胎児には、何らかの影響があるのでしようか？

—「甲状腺ホルモンは胎児の成長にも欠かせないもので、母親から胎盤を通して、この大事な甲状腺に癌が、しかも小児に多発しました。この被害にあわれた子どもたちに、将来いい子どもが授かりますよう、我々が援助する事是非常に大切だと思います。」

—出産後の母体の容態も気になります。甲狀腺機能異常を有している病気（バセ

ー病等）では、その新生児に一過性の

甲状腺異常をもたらす事が多いのですが、通常はしばらくして自然治癒します。しかし、この時期から乳幼児期にかけて甲状腺欠損や、異所性甲状腺腫等からのクレチン症があると、成長障害や知能（TSH增加の有無をチェックする必要があります）障害をきたします。従つて新生児期から膀胱血あるいは耳介からの血液で、TSH増加の有無をチェックする必要があるわけです。出生後三ヵ月以内に甲状腺剤が投与されない時は、非可逆的（元に戻らない）な知能傷害をもたらします

—やはり、甲状腺ホルモン剤は、安定的に長期的に支援していくなければなりませんね。

—これまでの説明から分かるように、甲状腺ホルモンが女性の妊娠・出産に、そして乳幼児にとって、いかに大切なものが御理解頂けたと思います。

—「エルノブイリ原発事故の後遺症として、この大事な甲状腺に癌が、しかも小児に多発しました。この被害にあわれた子どもたちに、将来いい子どもが授かりますよう、我々が援助する事是非常に大切だと思います。」

（聞き手 矢野宏和）

Chernobyl Nuclear Power Plant Emergency Response

昨年12月15日各紙にて報道された通り、1986年4月26日の事故以来、今まで唯一稼働を続けていたウクライナ共和国 Chernobyl 原発3号炉がついに閉鎖されました。

事故が起きた4号炉をおおう「石棺」と呼ばれるコンクリートの激しい老朽化が指摘されつつも、閉鎖やそれに伴う解雇などの事情により、今日まで稼働し続けていました。閉鎖のための資金をG7各国などで分担することで、21世紀を目前にして全面的閉鎖が実現しました。

たくさんの募金をありがとうございました。多くのみなさまからお寄せ頂いたあたたかいご支援、ご協力に深くお礼を申し上げます。

英子 中谷庸子 木村みさ子 小澤氏子 船越

都 小早川稔子 飯間憲子 酒井淑江 深堀ミ

チ子 川島則子 寺園峯子 池田陽子 佐藤直

子 有馬鈴子 岩越酒店 村上和代 松上信子

日高太 長野淑子 萩丸淑子 村上善子 川

原登喜の 山崎玲子 近藤和美 松井岩美 井

上サチエ グリーンコープ生協おおいた 小坂

隆子 下田守 相川美智子 山田美佐子 特定

非営利活動法人BNH テレコム支援協議会 石

井トミ子 岸川美好 津曲由香 堀切レイ子

本村紀子 安富恵子 葉祥明 森山明子 湯ノ

原光 川崎君子 岩田整形外科医院 岩田俊宗 上

野智子 桜子・雅子 めぐみ保健園職員 同

我毛弘子 高木歯科クリニック

崎光子 鳥原良子 豊田礼子 鶴田実穂 日本聖公会

宗像聖パウロ教会 河村節子 大場満 深水陽

多野満寿美 大島淳子 大田三山希 池田篤子

浜田勢子 奥平篤子 山田政巳 平山淳子 波

人 井倉順子 三根麻理子 清水伸子 仮屋園

鳥原良子 新納ゆかり 中津市立小楠小学校児童会

のみなさん 松永和子 進藤輝幸 池田典子

西倉真寿美 大谷正穂 畿恵 ジヨンソン仲子

小堀恵理子 小熊真理子 渕田三輝 篠光清

孝 伊東眞司 林田英明 アイランドソーセ

ジンター 堀内隆治 松下京 西村三景 和田伸

子 入田すます 中村洋子 橋口日出夫 徳永

ヨウ 林田洋子 久保力ヨ子 土持秀男・山利

子 グループむなかた山田昭子 野中孝子 黒

田恵子 森孝太郎 鈴木直美 佐田蘭美 矢内

恵理子 泰素子 尾崎良子 河田歌子 児島久

規子 足立信子 岡田望 川端紀代 小出とし

え 南村千里 サトウ矯正歯科クリニック 野

原初五郎 富永智子 山崎木吉 池田富子 黒岩

澤田和子 小森順子 チェルノブイリを支援す

るコーヒーの会 三輪幸子

総額

(敬称略 順不同)
三五〇万八千八七円

(二〇〇〇年八月七日～二〇〇〇年十二月二七日)までに募金を寄せて下さった方で通信にお名前をご紹介する許可を下さった方ならびにチエルノブイリ支援コーヒーの購入を通して活動を支援して下さった方のみ、掲載しています。」

非常にご多忙な中、第8回移動検診へご協力下さった武市宣雄先生 清水・雄先生、山田規予美先生、藤岡智美様、山田英雄様、また前回に引き続き、今回の検診團派遣でも、アイランドツアーセンター様により渡航手続き等で大多なご協力を頂きました。この場を借りてお礼申しあげます。

(財)ソロプロミスト日本財団より

国内国際奉仕賞を受賞

昨年十一月、大阪で開かれた(財)ソロプロミスト日本財団の大会で、チエルノブイリ支援運動・九州の活動に対し、同団体から国内国際奉仕賞を受けました。これは、これまで支援運動・九州の活動をご支援下さってきた同団体小倉西支部の地域推進によるもので、十二月十六日、大阪で代理受賞を受けた小倉西支部代表より、小倉千草ホーテルで開かれた小倉西支部例会の席において、支援運動・九州に日録と副賞の五〇万円の授与されました。推薦をしたソロプロミスト小倉西にとつてもたいへん名誉なこととの言葉を頂戴しています。高い評価を下されたこの喜びを胸に、さらに気を引き締め、今後も地道に誠意ある活動を続けていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

しえんうんどうQ&A

Q チエルノブイリ支援運動・九州に寄せられた募金はどうやって使われるの?

A みなさまからお寄せ頂いた貴重な募金は、今年5年目を迎える「甲状腺がんの移動検診」の派遣費用、またベラルーシ国内の医療機関(国立甲状腺がんセンター、国立第10番病院、ストーリン地区中央病院)への医療器具・医薬品等の支援に当たられます。これらの医療支援物資は、ベラルーシ国際赤十字を通じて、最も必要な機関へ確実に届くよう細心の注意が払われています。その他に、年3~4回発行する『チエルノブイリ通信』のほか、展示のための写真パネル・リーフレットの制作、事務局機能やホームページの充実化など、現地の情報を伝えるための活動を行っています。今年4月には、事故15年目企画として、現地からゲストを招いての報告会を予定しています。

現在でもなお、甲状腺ガン手術後の薬が慢性的に不足しており、さまざまな形で事故の被害が続いているという現状があります。チエルノブイリ支援運動・九州では、みなさまとチエルノブイリを結び、より充実した活動を行えるよう2001年もますますの努力を行っていく方針です。日頃より多くのみなさまからのご支援に対し、心より深く感謝申し上げますとともに、今後とも引き続きあたたかいご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

チエルノブイリ支援運動・九州運営委員一同